「高山市民の森 森林教室」実施報告書

令和５年 10 月 12 日

実施日時： 令和５年 10 月８日(日)
実施題目： 森の散策とバウムクーヘンづくり
参加講師： 主担当； 小嶋博、高橋健三
　アシスト会員； 青野ダイチ、越智寿美子、小久保忠嘉、小長井賀之、佐野文彦、
　　杉山雅章、早川和男、矢下博
参加者：　 11 グループ 39 名(内訳;大人 27 名、子ども 12 名)

【イベント概要】10 時～11 時 20 分： 森の散策
　　12 時～14 時： バウムクーヘンづくり
　参加者を６班に分け、森の散策とバウムクーヘンづくりをした。
あいにくの空模様だったので午前の散策時間を短くして、昼食後 12 時よりバウムクーヘンづくりをした。 以下に、各班の散策の様子やバウムクーヘンづくりについて、各班からの報告をもとにまとめてみた。

【散策の様子】
　１班は、２家族６名で内２名が子供であった。今日は十月八日ということで十と八を組み合わせると”木”になるので『木の日』だよと話し、木の有用性などの説明をしようとした。ところが、茂みの中にカモシカがいるのを男の子が見つけて大騒ぎ、カモシカは悠々として逃げる様子もなくみんなでしばらく観察した。落ち着いたところで、キジョランとアサギマダラの関係を話した。近くにジョロウグモの巣があり雄雌つがいでいたのでクモの話をする。次にモチツツジの葉っぱに触れてもらいネバネバ感を肌で感じてもらった。ガマズミの実を食べてもらい酸っぱさを体感してもらう。次に食べてはいけない実もあることをミヤマシキミの前で説明した。シキミは「悪しき実」からきていることも話した。ショウジョウバカマの前では子孫繁栄のため花が咲き、実を付けた時には茎を高く伸ばして種を遠くに飛ばそうとする植物の生き残り戦略の話もした。

　池のところでは、「以前来た時にはこのフェンスはなかったのに･･･」という参加者がいたので、ミズバショウをシカやカモシカの食害から防ぐためのものであることを説明した。尾瀬の水芭蕉の話もした。残念ながら、小雨が次第に本降りになってしまったので、その他はざっと説明をして散策を終えた。３ 歳のこどもさんもお父さんに抱きかかえられながらずっと行動を共にした（偉かったよ！）。
(担当;早川)

　２班は、２家族５人で出発した。一家族の子どもが車酔いの為父親と一緒に残り、母親だけの散策となったからだ。まずはキハダの紹介から。キハダの名の由来について樹皮を少し削って観察し、その薬効を説明。初めて見る黄色の内皮に驚いたようだ。続いてミズメの香りを体験してもらったが、これも初体験だった。高山の池では、この池が沢の始まりで、その周辺で起きている谷頭浸食につ

いて説明、それに伴って露出するピクライト玄武岩の地層について解説を加えた。隣接する広葉樹の森でアブラチャンの大きな果実を観てもらい、名前の由来や燃えやすい性質、果実から油を採取したことなどを話す。カラスザンショウの大木があり、刺が丸く鈍形となっていたのでそれについても説明した。

足元の土を少し掘って山の土壌を観察してもらった。枯葉⇒腐葉土⇒土へと変わってゆく様子を見てもらいながら、土壌生物と植物の関係を説明した。片足の靴の下に生息する土壌生物の数や年間の落葉量を質問して考えてもらい、大量の落葉があっても枯葉の山とならず土壌を作って森を維持する土壌生物の役割や重要性、森の資源循環について分かり易く説明し理解していただいた。中間展望台の手前は、コアジサイの群生地で、5 月末から甘い香りが楽しめることも説明しながら「森の恵み」へ急いだ。 (担当;杉山)

3 班は、0 歳児を連れたご夫婦とその両親と思われるシニアと 60 代女性二人の 2 グループだった。森の恵みから駐車場までの道では、マタタビ、タラノキ、キリ、ガマズミなどを観てもらい、更に右に登ってミヤマシキミ、コアジサイ、ショウジョウバカマなどを紹介した。またクロモジの所ではその枝を折って香りを嗅いでもらいつつ、これが茶の湯の和菓子をとる楊枝に使われていることを話した。次に、スギとヒノキの葉、樹皮の違いを説明した。林下にたくさん育っているヒサカキはサカキの代用であることや、葉の先端が凹んでいる特徴も観ていただいた。高山の池では、そこで出会った管理人から以前の大雨でダンプカー10 台分もの土砂が流れ込んでミズバショウも 10 株ほどに減ってしまった、という話を聞いた。その後、ヤブムラサキの葉の感触を感じてもらったり、スギとヒノキの球果の違いも確認した。 (担当;青野)

4 班は、 知り合い同士の 2 家族で 6 名を案内するが、子どもは 0 歳と 3 歳児の為実質 4 名だった。高山は初めてとのことであった。五感を使っての体験をしてもらい、感想を聞いたり、こちらの質問に答えてもらったりした。例えば、ミズメの樹液の香りを嗅いだ後で「香りがあるのはなぜ?」、キハダの樹液をなめた後で「苦いのはなぜ?」、ガマズミの実を味わってから「実はなぜ赤いの?」、「種子はなぜ遠くへ散布する必要があるの?」などだ。参加者からは、「実が赤いのは鳥に目立つようにするため」、「種子を遠くへ散布するのは日陰を避けるため」 などと積極的に回答していただいた。種子散布では、実際に色々な実を観てもらい、鳥散布、風散布、自力散布などいろいろな散布方法があることを補足説明した。イロハカエデについては「紅葉は知っていたが、種子がプロペラ型なのを初めて知った」との声が上がった。その他、カモシカが草を食べているところを見つけ、3 歳児も喜んでいた。 (担当;小長井)

5 班は、3 名の家族連れとシニア女性 3 名の友人からなる 6 名の混成チームだった。しかし、家族連れの方は道に迷い遅れたため途中から散策に加わることになった。このような事情に加え散策に充てる時間も短く、また途中から雨が降り出したので、結局”森の恵”周辺の樹木を観て回るだけとなってしまった。その代わり一つ一つの樹木について「さあ、この木は何という木でしょう?」というクイズばりの質問から始め、名前とその由来、識別のための特徴、また樹木ハンドブックの絵を見せながらその花や実の形、そして我々の生活にどうかかわっているのかなどを丁寧に説明していった。例

えば立派な実がたくさんついたタラノキなども、参加者の頭にあるタラノキはタラの芽が付いた刺だらけの棒杭のような姿でしかなく、のたくるように枝を伸ばし空を覆うように葉を広げた巨大な姿などは想像もつかなかったようだ。参加者はこうした一つ一つの解説に驚いたり感心したりで、「何十年も生きてきて、初めて知った。とても勉強になった」と喜んでくれた。 (担当；小久保)

6 班は、2 家族 7 名(うち子ども 4 名)だった。散策を始めると、子どもたちは地面の方ばかり気にしている。どうやら虫を探しているようだ。虫取り網を持った二人は、早速、バッタやコオロギを捕まえて虫かごに入れていた。やはり子どもは動くものに興味があるようだ。子どもたちにも、木の名前を知ってもらいたかったので、特徴のある木を探しながら散策した。タラノキの刺のある幹や、ガマズミの実を観察して種子散布の解説をした。「高山の池」では、この場所がモリアオガエルの産卵場所になっていることや、トンボのヤゴやイモリも生息していることを知ってもらった。

次に「中間展望台」を目指して山路を歩いたが、傾斜がきついので女の子は歩くペースがゆっくりとなってしまった。しかし東屋が見えると急に歩くペースが上がり、すぐ展望台に到着した。曇ってはいたが海まで見ることができた。近くの山々に目をやると針葉樹と広葉樹が区別できる森が見えたので、こうした樹々の見え方の違いを解説した。東屋の近くにスギとヒノキがあったので、葉や実の違いを知ってもらった。帰りはクロモジの香りを嗅いだり、板状になったヒノキの根を観察した。途中、雨に降られたが森の中では木々が傘の代わりになるので、濡れないことも体験できた。短時間の散策ではあったが十分楽しんでいただけたと思った。 (担当；佐野)

【バウムクーヘンづくり】

午後からは、森林教室でなぜバウムクーヘンづくりをするのかを丸太の年輪を見ていただきながら簡単に説明をして、森の大切さや効用を知ってもらった。その後、外に用意した 3 個のドラム缶製の窯で 6 本 (各班 1 本)の竹に生地を塗り付けてバウムクーヘンを作った。生地作りでは子どもたちが”こね回し”を楽しんだり、竹に生地を塗ったりしながら焼いていき、何重にも焼いてバウムクーヘンを完成させた。この工程では大人も子どももワイワイガヤガヤと楽しんでいた。完成したバウムクーヘンはゆっくりと竹を回しながら外して出来上がり。しっかりと年輪ができていた。出来上がったバウムクーヘンは紅茶を飲みながら全員で楽しんだ。参加者には満足していただけたものと思う。

◉次ページに当日のスナップ写真を添付した。

（全体まとめ； 小嶋）

以上

当日のスナップ写真

当日のスナップ写真